〔講演〕

# 社会主義再訪

加藤周一

## はじめに

標題に「社会主義再訪」と題をつけましたが、これは私が社会主義国を割合最近たづねたものですから、社会主義国再訪と言う意味と社会主義の「再考」つまり再び考えるという意味を兼ねて「社会主義再訪」ということにしたのです。

どうも、今日は京都で、しかも法然院で河上肇先生の記念の会にお招きいただきまして光栄です。河上肇研究の方がたくさんいらっしゃるし、みなさんがよくご存じだと思いますので、そこで話をさせていただくというのは私には大変光栄です。

それで河上肇論をするほどの準備が私のほうにないので、少し話がずれますが、社会主義はもちろん河上肇の中心問題ですから、社会主義一般の問題と河上先生がもし今生きていらっしゃったらどういうふうにするか、どういうところに河上先生のお仕事が現在の状況にとっての意味があるだろうか、ということをお話したいと思います。

私はもう二か月近くなりますが、四月から七月まで一学期、ベルリン大学におりました。ご承知のように東西ドイツは統一しましたが、元の東ドイツは元社会主義国です。それからソ連とかハンガリーとか、そういうところと接触がありました。そういうことからお話をしようかと思います。

今日の私の話は、大体三つの部分にわかれています。第一は、現在の時点で社会主義国の歴史、ソ連についていえば七〇年位になりますし、東ヨーロッパについてい

えば四〇年くらいになりますが、社会主義国の一種の崩壊現象が生じているので、社会主義国の歴史の決算、どういうプラスがあってどういうマイナスがあったか、現在はどういう状況になっているかということを最初にお話をしたいと思います。もちろん私の一存ですけれども。

それからそこで出てくる非常に大きな問題は、いろんな問題が出ていますけれども、一つの問題は労働倫理の問題、あるいは労働意欲の問題です。一般的に言うと、これは計画経済の問題だろうと思います。そのことを二番目にお話をして、三番目には社会主義そのもの、社会主義のやや哲学的な面というか思想としての社会主義、そこは現実の社会の発展のありかたと関係していると思いますが、同じではないけれどもイデオロギーとしての、思想としての社会主義、ことにマルクス主義について私の感想の一面をお話すること、大体この三つお話したいと思います。

（一）

一番はじめに、七〇年、四〇年と社会主義政府のつくっていた決算の問題であります。私の実際に体験し実際に観察したところによりますと、一番最近ドイツに住んでいたものですから、元東ドイツには自由に入れますからどういうふうになっているかということがよくわかります。

日本から飛行機でいけば日航のベルリン直行便が着陸するところは元東ベルリンの飛行場です。西ベルリンには二つの飛行場があって、そこが今主要なベルリンの空港なんです。それだけで間に合わなくなったものですから、東側の日本語に訳すと「美ヶ原」ということになるのですが、そこの飛行場を使っています。まず飛行場の設備が非常に悪いんです。西ヨーロッパで言うとよほど田舎の空港でもこの位設備の悪いところはないと思います。日本で言えばやや小さな飛行場で、例えば福岡とか北海道とかそういう所に比べるとはるかに悪いですね。多分日本の一番小さな、一番田舎の飛行場位かそれにも及ばない位の空港であって、大変遅れたものです。

それから自動車をつかいますと、道の状態が非常に悪いです。補修が非常に悪くてでこぼこが大きい、東ベルリンから西ベルリンに入ると道が急になめらかになりますから自動車が速く走れる、あるいは逆に行けば、でこぼこがはげしいので急に速度を落とさないと通れないんです。道は狭い。ベルリンだけじゃなくて東側は道路事

情が悪い。それから鉄道は、ベルリンが元東ドイツのまん中にありますから、そこから西側に行くときでも東ドイツ側の鉄道線路を走って、それから西側に入るわけですね、鉄道の速度もまるで違います。西ドイツではかなり速く走っている鉄道が国境を越え、東ドイツに入ると突然遅くなるわけです。なぜかというとレールが悪いからです。

だから、飛行機の輸送、鉄道輸送、自動車輸送という交通機関の基礎構造、インフラストラクチャーが非常に悪い。私自身の観察ではありませんが、多分港湾もそうでしょう。ですから、大体、流通の基礎構造が非常に遅れていて悪いんです。おそらく、西側の水準にもっていくためには全部変えなきゃ駄目でしょう。線路を全部変える、道路をつくり直し、あらためて舗装する、飛行場はほとんど新たな建設に等しい、そういうことをしなきゃならない。たぶん港湾もそれが必要でしょう。だから非常に大きな投資が必要になっています。それはいろんな人が言っているんですが、コール首相自身もふくめて西側の期待、ドイツ人自身が予想したよりも悪い状態で、したがって財政的な投資が予想以上に大きくなる。それで、今の西ドイツの大きな問題の一つは東ドイツに金を注ぎ込んでなんとかしなきゃならないが、それは非常に難しい。それが基礎構造の遅れの問題です。

それから第二はサービスの問題です。これは東ドイツはそんなに違わないかもしれませんが、大体モスクワからポーランドの方に出ても、あるいはプラハに出ても、東ドイツ・ベルリンに出ても、みなさん旅行された方はご存じのようにサービスが非常に悪いんです。つまりホテルとか、レストラン、旅行社、そういったところのサービスが非常に悪い。それはモスクワから社会主義圏をとおして非常に悪い。サービスという観念がなかったと思います。だからかなりひどい、その一つは食堂にはいるときは、モスクワでは恐いんですよ。ウェイターが恐い、注文するとすぐどなられるし、第一呼んでも来ないし、来ても大変高圧的で、だからむしろ恐れているんですから。

社会主義の当時ですが、旅行された方はどなたでもお感じになったと思いますが、ことに食品は国によって違いがありました。大体食べるものはあるんだけれども、質があまりよくないということ、味とか。それから種類が非常に少ないというのが目立ちます。食べ物の選択の余地が非常に狭いから、決まったものを食べないと他に

食べ物がないということがあるわけです。しかし、どこでも同じではない、私の知っている範囲では、おそらく東ドイツはあまりよくないけれども、たとえばハンガリーは食べ物がよかった。今の話はヨーロッパですが、中国も食べ物はずいぶんよいところがあると思います。

耐久消費財で一番目立つのは自動車です。我々の経験からいうと日本に限らず西ヨーロッパも大体同じ傾向ですけれども自動車そのものが非常によくなったでしょう。戦後はやたらに故障したんですね、故障した車が道際に止まっていた。約束の時間があり、途中で故障するといけませんから、故障しないことを祈りながら乗る、という感じでした。日本では、今はほとんどなくなったでしょう。しかし自動車の質は非常によくなったが、道路が混んでいる、我々の問題は自動車が故障するんじゃなく、自動車の数に比べて道路がむやみに遅れていることですね。

東ヨーロッパ社会主義国の自動車、乗用車に関する限りは大体悪い、質があまりよくない。それで西側で売るというのは不可能な程度に悪いと思います。そういう点から耐久消費財の質が非常に悪くなっている。今申し上げたように流通の基礎構造とか、サービス部門の活動とか、質とか、さらに消費財の質とかが悪いということ、その背景にはおそらくもっと深い理由がある。そこで問題になるのが、労働意欲の問題であると思います。

（二）

労働意欲がだんだん悪くなる、ソ連の場合ははじめはそんなに悪かったわけではないんですが、ゴルバチョフの時代、ペレストロイカになってから急に労働意欲の低下がおり、どんどん悪化していることです。労働意欲が一番の問題だと思います。これは印象だけじゃなくてモスクワの人たち自身がそういうことを言っているわけで、大きな問題だと思います。

もう一つは一種の仕事に対する熱意というか、仕事を綺麗に仕上げたいという意欲、一種の職人気質みたいなものです。職人が自分の仕事をちゃんと仕上げることが気持ちが良いわけでしょう。よく仕上げるとお金がもっと取れるとか、組織の中でもっと昇進する可能性が大きいとか、そういう理由がなくても、ただ本人自身の内的問題として仕事が歪んでできるより真っ直ぐできた方が気持ちが良いという、そういうのがあると思います。それを職人気質と言って一種の仕事上の、労働上の完全主

義みたいなものであるとしますと、これは労働意欲の問題とちょっと違うと思いますが。それがまったく無い、ほとんど残ってないんです。ただし残ってないのは工業化社会の中でほとんどすべての国であって、たとえば英国とソ連とくらべてもその点では大して違いはないだろうと思います。だから工業化は職人気質をつぶしちゃっていますから、むしろ日本のほうが例外で、ある意味では生き延びているのじゃないんかと思います。

今までの七〇年、四〇年の社会主義の歴史の最後の決算の帳尻はマイナスですね。インフラストラクチャーは悪い、サービスは悪い、それから消費財の質は悪いというのは非常にマイナスです。これはちょっと否定できないと思います。

しかしプラスの面もあると思います。その一つは公共的な健康ですね、広い意味での医療と公衆衛生です。ほとんどすべての国で急性伝染病はコントロールされています。もちろん、日本でもコントロールされていますけれども、社会主義国ではほとんどすべてです。まだ急性伝染病は、ラテンアメリカからアフリカ、アジアの大部分の国ではありますね。水が飲める社会というのは非常に少ない、北米と日本と西ヨーロッパと、あとどこでも水を沸かさないで飲んでも大丈夫か？　断然社会主義国は良いのですよ。ソ連の中央アジアでもまあ水を飲んでも大丈夫だと思います。そういう国は、中米から南米にかけてない、アフリカでおそらく一つもないんじゃないか。それは大きな達成だと思います。それから病気になった時の医療もただみたいなのがあって、そういう点はとくにソ連の医療は良いと思いますね。そういうことがプラス面であり、それは大きな達成だと思います。

今は資本主義が勝って社会主義が負けたというので、マイナス面だけの強調がありますが、そんなことはないですよ。だからもっと客観的にみたら、マイナス面も重大な問題で、大いにあるけれども、プラス面も大いにあると思いますね。

第二に教育です。教育は東ドイツでもソ連でもどこでもずいぶん問題をかかえていますが、小学校から高等教育までの教育には、ほとんどただ、ほとんどお金がかからない。そういうことも大きな達成だと思います。高等教育がただだということは非常に大きな問題です。日本の場合はかなりかかるでしょう、ことに私立大学のお金が高いですね。米国はすごいです、一流大学に私立大学が多いから、そういう所はむやみに高い。大体大学の教

授が自分の月給でこどもを自分の大学に送ることができない。たとえばハーバード大学の教授がもしその月給だけで暮らしているならば、自分の息子ないしは娘をハーバード大学へ入れることはちょっと躊躇するでしょう。その位高いんです。それで社会主義はそれができるのでプラスの面だと思います。

それから三番目は芸術です。これは人間がやりますから、いろいろ難しい問題があると思いますが、技術的な面に関するかぎり水準が高い。とくにお金がかかる芸術というとオペラとかバレエとか、芝居、それからオーケストラは技術的水準が高いです。あれだけの質の高い、技術的にそろった劇団をつくって、バレエ団をつくって、オペラの歌手やなんかも、それからオーケストラ、もとはレニングラード、いまはペテルブルグのオーケストラの質は非常に良いでしょう、世界中で一流のオーケストラです。芝居で言えばモスクワ芸術座、何度もみましたが、あのくらい技術的な意味での役者が上手なところというのはおそらく英国とソ連しかなかった。日本は新劇で言ったらはるか遠く及ばない。たとえば日本だったら、チェーホフをやると一人上手な人がいるでしょう、あとは大体素人に毛が生えたようなものでしょう。だけど極端に言えばモスクワ芸術座だと「桜の園」で、お茶をもってくる、だれか召使い、主役じゃないですよ、台詞もほとんど言わないですよ。彼が一度舞台に現れたら全体が引き締まる位、上手なわけ。だからその位上手な役者、他の国ではみんな主役ですよ。そういう技術的な意味で芸術を高い水準のところにもっていったことは明らかなメリットだった、他の問題はありますが、しかしそのこと自体はプラスだと思います。

それから四番目は軍事技術です。ちょうど一九三〇年代の戦争前の日本みたいなもので、生活のかなりの程度に消費財がおさえられていて、生活水準がそんなに高くないのに、一流の技術者と資本を他の部門の犠牲において軍事技術に投入したんでしょう。だから軍事的な技術は非常に進んだと思います。軍事技術でアメリカと匹敵する国はソ連だったわけですから、現に冷戦の時に軍備競争があって、まことに不幸なことであるけれども両方にとっては。しかしとにかく技術的な発展というのは大変なものです。一九一八年のロシアの工業技術水準は、西ヨーロッパよりずっと遅れていた。それを軍事技術に関しては、とにかく世界で一流の、はるかに西ヨーロッパを抜いたというのはある意味では技術的成果と言えな

いこともないです。軍事的技術が発達してまわりにも波及効果がある、たとえばジェット機がそうです。旅客機にジェット機を導入したのはそんなに違わないが、ソ連の方が早かった。とにかく最初に旅客機にジェット機を使いだしたのはアメリカでなく、ソ連です。だから明らかにジェット機と運行に関する技術が軍事的な部門で発達していてそれが波及して旅客機になった。

だから今申し上げたようなところはプラス面というか、社会主義の成果としてつくりだしたものなんだと思います。そのことは衛生と教育と芸術と軍事技術で、そしてそれはみんな経済学的にいえば贅沢で、再生産過程には入らないものです。だからそういうところで成功しているというおもしろい現象がある。再生産過程がうまくいってなくて再生産過程から外れたバレエダンスとかなんとかいうことになると世界中で一番であり、世界中たくさん回れるのはソ連のバレエだということになるわけですが、しかしこれが全然生産に関係ないわけです。社会にとって大事であるけれども、しかし経済的にはまったくの贅沢なわけでしょう。ダイヤモンドの指輪と同じことでしょう。だから、そういうところが非常に成果があった。どうしてそういうことが可能なのかということは、多かれ少なかれ、中央集権化された計画経済と関係があると思います。つまり市場経済じゃないということです。これが第二点ですね。

（三）

それから第三は、政治的自由の問題です。それはいろいろと前から大体自由がないと言われていますが、かなりの程度、それは本当だと思います。

自由の問題よりも一般に情報公開と利用できる情報の量が大変少なかったと思います。とにかく秘密主義なわけです。よく冷戦のときに、クレムリンの専門家というのがいて「クレムリン学」と言うのが発達したくらいですから。「クレムリン学」と言うのは、いろんな式典やなにかがあったときに、要人がでてきて上の壇に並ぶときに、並んだか並ばないか、並んだにしてもどういう順序で並んでいるかというのを詳しく研究・分析して、だれが力をもっているだろうかということを言うわけです。そういう「クレムリン学」が発達したということは、いかに政治過程について情報が公開されていなかったか、すごい秘密主義かということをあらわしています。

今だったら「経世会」（竹下派）でも、中でいろいろ

やっているとか、だれとだれの勢力争いだとかテレビで言ってますから、あれがソ連式だと小沢さんとか小渕さんとか、そういう人が出てきたときにどっちが先に出るとかということだけから内情を推定しなければならない。だから日本はそれ程秘密主義ではない、そしてアメリカだったらもっと自由です。中の情勢が良いも悪いもみんな出てくる。ただ事実の問題として政治過程の情報公開は、はるかにアメリカのほうが日本よりもあり、日本は半分秘密主義です。日本よりもずっとモスクワにしてもベルリンにしても徹底的に秘密主義です。

もう一つは国際情報に対して、なにしろソ連は徹底的な鎖国です。それから東ヨーロッパも鎖国主義です。中にいると外のことはわからない。私はソ連に二ヶ月ほど暮らしたことがありますけれど、その間外で何が起こっているか、日本がどうなっているのかわからない。いろいろな問題があっても一切報道されません。私はロシア語の能力がないというだけでなくて、事実書かれていない、だから極端に外国のことはわからない。どうしても知りたい人は外国の新聞を見たいと思うでしょう、しかし外国の新聞は入ってない。英語にしても何語にしてもロシア語でない新聞が入ってない。テレビで見ることも非常に困難です。いや、そんなことはない、モスクワ中央図書館に行けば各国の新聞が取ってあると言われる。けれどもモスクワは大きな街で、中央図書館に一部外国の新聞があるといって、普通の市民にとっては、それはないのと同じことです。だから私は二ヶ月いる間に要求して「何か新聞を」と言ったんですが、結局英語で「デイリーワーカー」、イギリス共産党の出している新聞とか、それからオーストリアの共産党の新聞、それからフランスの「ユマニテ」とかしかないです。普通の新聞は手に入らない、要するに鎖国状態でした。だから、今でも外国のことを知らない。それで四〇年間経ってますから、つまり東ドイツの人が西ドイツの人と違うのは外で起こったことを知らないで四〇年間暮らしていたのです。だからものの考え方が違う、要するに情報の極端な不足の状態がつくりだされていたということです。

それから二番目は、これは有名ですが、秘密警察がある。それと当然のことですが密告があって、今東ドイツ側の最大の問題は元秘密警察とその協力者の問題です。ソ連はＫＧＢで、東ドイツの秘密警察は国家安全局、略して「スタージ」と言うんですが、そのスタージに非常にたくさんのインフォーマルな協力者がいて、その協力

者は今の職から追われるということがあります。毎日そういう問題があり、一種のヒステリー状態があります。私は今年の四月から七月までベルリンにいました。大体日刊新聞で毎日スターリンの話が出ていないことがない位です。だれかが引っかかって、だれかが問題になっている。ほとんどスターリンヒステリー状態に近い。それほど秘密警察が強かった。これはもちろん政治的自由の正反対ですから、政治的自由が極度に制限されていたということです。いろいろな事情があるけれども、ソ連の社会主義が七〇年たった後でそういう状態です。東ドイツでも四〇年間の社会主義政権があって、その結果徹底的な鎖国主義と徹底的な秘密主義と警察です。ちょっと弁解の余地がないと思います。

それからもちろん一党独裁ですが、一党独裁だけでなくて共産党政権ですから、その政権が同時に価値の最高の権威であるという。自分が絶対に正しいということは、スターリンのときもそうでしょう、あらゆる事についてスターリンの判断は間違いがないと究極的に決定する。カトリック教会の法王みたいなもので、誤らない最後の権威です。価値判断の最後の権威は党と政府であるわけです。それが法王と違うのは、法王はいま権力を持っていない、軍隊をもっていない、あるいは秘密警察を持っていないが、政府は秘密警察を持っていることです。物理的な権力と価値の最高権威とが同時に同じ人物、同じ党、同じ政府が兼ねているわけです。そういう状態は普通は目的が手段を正当化することになりがちなんです。目的が聖なる目的だから、日本の前の戦争も聖戦ですから、天皇陛下のご命令、天皇陛下は神様ですから、絶対に間違いがないわけです。軍隊は天皇に属していますから、そうなると目的のためには手段を選ばないということが何処でも何時でも出てくる。

価値の権威と権力とが一体化すると、一体化した力は自分自身の目的は聖なる目的だから、それを達成するためにはいかなる手段を用いてもよい、あらゆる手段の動員ということになるわけです。目的が手段を正当化するということになると、社会主義の建設のため、あるいは天皇陛下のためだったらなにをしてもよいということになるんです。なぜならこちらが絶対的に正しいからです。社会主義の建設というのは、スターリンの理解した限りでの聖なる目的だから、そのためには反対する奴を追い払ってよいわけです。それが強制収容所ということになるわけで、目的が手段を無限に正当化してしまうんです。

そうすると手段の選択は無限に自由になって、いかなる手段でも用いられるということ、最後の行き着く先は人権の蹂躙ということになり、計画的な巨大な人権の蹂躙ということになります。以上が政治的自由に関する問題です。

（四）

それからもう一つは思想的自由がないような状態です。今いったような事情の中でマルクス主義のイデオロギーが一種の動脈硬化状態をを生じて動かなくなる。たとえば政府が、何がマルクス主義かという解釈のしかたを決めますから、他のまわりの人が黙っているということになる。「私はこういう解釈ができるかもしれない」と言っても潰されてしまうから、そういうことを言ってもしようがない。正しい解釈を政府がいつも持っているということになり、新しい解釈がでない、だからマルクス主義のイデオロギーが発展するということがない。大きな変化、いわゆるネオ・マルクス主義が発生したのは社会主義国の外でおこったんです。かなりの程度言論の自由のあるところでおこった。たとえばホルクハイマーにベンヤミンなど、ドイツのフランクフルト学派に該当するのは、ソ連の中にはおこりえない、おこりかければつぶしてしまうからです。また、フランスのアルチュセールも、サルトルにしてもマルクス主義に近づいて、ある解釈をしたわけだけれども、社会主義国のなかからはそういうことが出てこない。いくらかは東ヨーロッパ、ポーランドの経済学者とかにあるけれども、しかし総じて全体的にはない、東ドイツにもないんです。

だからイデオロギーの膠着状態です。一度できたら教条化してそのまま硬直する、そのように硬直したことが同時に二つの大きな要素に蓋をしてしまった。その要素の一つは宗教です。ソ連のギリシア正教、それから東ドイツはプロテスタントです、ハンガリーもポーランドもカトリック教で、これは蓋をしてもなくならないんです。現在の宗教の問題は非常に大きな問題になりました。

それからもう一つ蓋をしてもなくならなかったのは民族問題だと思います。社会主義はインターナショナリズムであり、ナショナリズムそのものは問題にしなかった。だから現在のナショナリズムの噴出は不意打ちです。文化現象はナショナリズムを軸として出てきて、それは宗教ともからんでいるから両方とも盲点です。今まで考えたこともないんですから、その話しは黙っていたほうが

安全だと。それはイデオロギーの硬直の結果生じた現象だと思います。

（五）

そこで、最初の話にもどりますが、経済的な限界の一番大きな理由の一つは労働意欲だという事を申しあげましたが、労働意欲をかきたてる動機は五つあると思うんです。その第一はいわゆる物質的刺激というもので、マテリア・インセンティブです。それはよく働けばもっと月給をあげる、あるいはしっかり経営すれば儲る、物質的報酬がある、それがよく働かせるように作用する、つまり物質的刺激です。

二番目はそれと密接にからんでいると思いますが、市場の競争です。今盛んに言われている市場競争、よく働いて新しい、質のよい製品を市場にもっていかないと売れない。だから会社がつぶれる、だから一生懸命開発して一生懸命よいものをつくろうというのが第二の要素だと思います。

それから三番目は理想的なイデオロギーの力で仕事に進んで行くということです。ある状況のもとではそういうことはおおいにあると思います。そういう理想的なイデオロギーの一つがマックス・ヴェーバーの言った十八世紀の資本主義初期のプロテスタンティズムです。それから東アジアでは、儒教圏、工業的なブームがおこっているのは韓国、日本、台湾、シンガポール――シンガポールは大部分中国人です、要するに儒教文化圏です。儒教が東アジアでは十六世紀のヨーロッパのプロテスタンティズムと同じような役割を演じたのではないかという考え方をする人があるので、そういうこともありうることだと思います。

それから、労働者が生産に自分で参加する、政治的過程に参加する。そのことによって社会全体で労働者の参加が強ければ、自分の社会主義をよくするためによく働く、つまり社会主義的理想が労働を刺激するということはあると思います。充分ではなかった、だから問題なんですが、しかしとにかくそういうメカニズムはある。それからもう一つはナショナリズムだと思います。ことにカリスマ的な指導者とむすびついたナショナリズムで、文化大革命までの中国が割に物質的インセンティブはない、非常に生活の程度は低く、そしてもちろん競争市場がない。どうして割に皆が働いたかというと、やっぱり毛沢東があるからです。毛沢東の大変強い牽引力があっ

て、そして精神的にみんな理想主義で毛沢東のためにたたかうというような感じでよく働いたと思います。明治の日本は労働者を低い月給――低賃金で、労働者にたいして労働意欲を失わせないで強い労働を要求しても、それがある程度可能だったのはもちろん警察もあるけれども、やはり明治天皇、天皇制をうまく使ったのではないでしょうか。これが私の言う多かれ少なかれ理想主義というか、あるいはイデオロギーによる労働意欲の刺激であります。

そして四番目は、先に社会と関連して言ったことですが労働者の参加、企業に対する直接の参加、あるいはもっと大きな社会に対する参加です。そして自分の社会だという感じがあれば、そのために働くということがあります。それは明治の初期に富国強兵との関連で福沢諭吉が言ったことです。福沢諭吉が「議会を早く開け」と言った一つの理由は富国強兵をすすめる時、お上の命令に従えというだけでは自分の国だと思っていないから、みんな本気で従わない、兵隊としては勇敢に戦わない、労働者としては強く働かない。だから議会をつくって自分たちの国だという意識を強めて、そのことが富国にも強兵にもつながるというのが福沢の議論だったんです。それは一面の真理だと思います。それは社会主義とも関連のある問題だと思います。

最後は五番目ですが、これはこれだけではだめだと思いますが、共同体意識です。パーティシペイション・参加によって強められた団体、伝統的な共同体のなかに個人が吸収されて、個人は自分自身を共同体と同一視する、アイデンティファイする、そういう状況で共同体が生産に向かうときは一緒に働く。つまり村共同体のたとえば「田植え」の時では、みんな出てきて割によく働く、なぜなら村共同体が単位であって、それが個人を引っ張っていくということです。しかし高度の共同体、ウェーバー風にいうゲマインシャフトとか、ゲゼルシャフトがあれば必ず強い労働意欲が喚起されるということにはならない。だから日本の場合には共同体自身が競争的状況に立ったとき、これは強い。

戦後日本の工業的膨張の一番強い動力は共同体プラス会社村です。そして会社共同体プラス猛烈な競争だと思います。内部でも競争させる、会社同志でも競争する、だから、競争市場のメカニズムと共同体の団結心と、団結しながら競争する。一種の野球の試合みたいなものですか、勝たなきゃならないから団結して野球するわけで

す。ただ団結だけではだめですが、しかし競争だけだと個人の競争になって、ヨーロッパ社会みたいになるから、両方をくっつけたものが問題で、したがって五番目の要素はある条件のもとでの共同体の機能ということになると思います。社会主義はイデオロギーの理想主義と参加意識をうまく喚起しなかったから、労働意欲を喚起できなかった。したがって警察力を使ってのノルマの強制とか、いろんな方法になってあまりうまくいかなかった。だから今労働意欲を喚起するのに市場経済といい、市場での競争に向かっているようです。ソ連はそう簡単にはいかないと思います。

計画経済は二つの面があると思います。一つの面は計画経済にすると、中央政府の官僚機構が大きくなる、それがある段階まで進むと官僚機構の非能率性が表面に出て来る。ソ連の場合には徹底的に出たでしょう。どんどん自己成長した官僚組織それ自体が特権層になって生産を刺激するために非常に非能率的なことになっている、これはマイナス面です。徹底的なマイナス面となったから崩壊した。しかしプラスの面は二つある。一つは市場経済との対比において市場での競争は短期なんです。日本の企業が割に長期的な計画を立てるのは純粋に資本主義的ではないからです。理想的な資本主義社会であれば競争はその場で勝たなくてはならない。もっと具体的には決算が年できますから一年経ったときの決算がプラスにならなくてはならない。市場での競争に勝つということは非常に短期的なんです。だから資本主義が純粋であればあるほど、別の言葉でいえば市場における競争が強ければ強いほど経営者は物事を短期的に考えるんです。同じ資本主義と漠然と言われていますが日本の場合と米国の場合と非常に対称です。米国の社長は一年たってもし損が出ていれば株主総会で馘になる可能性がある。日本の社長は一年経っても絶対馘にならないでしょう。それは資本主義的なルールで動いてないからです。別のいろんな要素があって社長は変わらない、株主総会にそれほどの力がないでしょう。だから日本には決算を見て赤字だから社長を変えようという株主総会はない。だから非常に安心して長くいられるから、一度社長になれば、長い計画を立てうるというのは、日本の場合は中間的な型です。しかし社会主義の官僚というのはもっと極端で、長くその場に居すわるわけですから、長期計画ができるわけです。有名な五カ年計画が何度もなされているように、長期計画が可能なんです。市場からは五カ年計画は

出てこない。だからアメリカでは五カ年計画ということは言わない。それが社会主義の大きな利点で、プラス面であります。

もう一つの利点はさっき申しあげた利益にならない事業というのは市場経済の論理からは出てこないでしょう。だから文化は出てこない、国民の衛生とか教育とかそういう再生産過程に入らない経済的に贅沢で、社会にとって致命的に大事なことはやりにくい、そういうことは計画経済だとできるからです。

（六）

最後にイデオロギーについて私の感想を申し上げたい。河上肇先生とも関係すると思うんですが、第一の問題は先に宗教と民族主義は、社会主義インターナショナリズムで無視されたと言ったけれども偶然無視されたのでもないと思います。なぜならば、社会主義のイデオロギーというマルクス主義は根源的に歴史主義だと思うんです。ヘーゲル時代の歴史主義からマルクスにいくわけで、十九世紀にドイツで発達したヒストリシズムです。歴史主義の考え方というのはすべての価値とか制度とかいうものが歴史的な時期によって違うということが大事です、だから古代から今日までのぶっ通しの価値とか、制度とかがあるのではなくて、それは時期によって価値も含めて違うんです。そして第二には、ただ違うだけでなくてある仕方でもって発展するということ、これが歴史主義の根本的な考え方であり、その点に関する限りヘーゲルでもマルクスでも同じです。どういう仕方で発展するかというのはヘーゲルとマルクスとで言ったことが違うが、しかしすべての価値と制度、社会のありかたが歴史的な時期によって違うんだということ、つまり歴史超越的な価値はない、発展するものだという考え方を歴史主義と定義するとすれば、その限りではヘーゲルでもマルクスでも同じです。ところがそれは歴史超越的な価値はないという考え方でありますが、しかるに宗教は歴史超越的な面をもっているわけです。

すべての宗教は宗教内部の立場からいえば歴史に超越する面をもっていて、歴史によって、時代によって違う問題ではなく、人間である限り同じ問題だといえる、歴史に超越する問題を扱っているんです。あるいはすべての宗教的体験論の根底は、歴史を超越する方角に向かっているわけです。しかし宗教が抽象的空間のなかにあるわけではなくて、実際の現実の社会の中にあるわけです。

現実の社会はもちろん歴史的な社会ですから、したがって歴史の外でそういうことをしているのではなくて、歴史のなかにあるわけです。具体的に教会というものは社会の中の一つの組織だし、歴史的発展をするわけですから、したがって宗教というのは歴史的にあると同時に、超歴史的なものです。あるいは歴史に中における歴史を越えようとする運動が宗教だと言ってもよい。宗教現象というのは内面的に超歴史的な観点から、あるいは神との関係とか仏との関係から見ることもできる。あるいは歴史の軸にそって教会の発展、教義の発展、信者の発展を歴史的に辿ることもできます。

だから歴史的に見ることもでき、分析することもできるし、非歴史的な超歴史的な観点から宗教にアプローチすることもできるんです。ところが歴史主義というのは純粋に一方の面からだけアプローチするわけです。だから簡単な言い方をすれば、半分は肝心のところが抜けるわけです。宗教が一番強いところ、なぜ宗教があるかという宗教のレーゾンデートルは歴史主義ではない。すべての宗教は歴史的に発展するでしょう、その限りではマルクスの言ったことはアブソリュートに正しいけれども、しかしなぜ宗教なのかという理由はそれでは説明ができない。なぜ宗教なのかというと歴史を越えようとする意思が宗教をつくるのだから。だから超歴史的な問題に対するアプローチの一つの形が宗教ですから、レーゾンデートルが無くなるわけです、歴史主義的な解釈からいえば。それが宗教問題が背景に退いた、無視された一番深い理由だと思います。

超歴史的な現象というのは人間の文化の中にはまだあります。もう一つは美学です。美しいもの、それはギリシャの彫刻でもイタリアのルネッサンスの絵画でも今の我々にも美しいわけです。もし美的価値が完全に歴史的時期によって違うのだとすれば、イタリアのルネッサンスの絵画は我々に訴えるはずないでしょう。我々に訴えるところのものは、イタリアの十六世紀にも日本の二〇世紀にも関係のない面がある。それで二〇世紀の日本人に訴えるわけです。そうでなくて、どうしてティチアーノが現代の日本人に訴えるんですか、彼は十六世紀のベネチアの人ですから、我々がベネチアに行ったこともなければ、十六世紀を全然知らない。だから美的な価値は歴史を越えるんです。絵画は発展したし、建築様式は発展したし、仏像の様式は飛鳥から白鳳になり、天平になって鎌倉まで変わっていくわけです。だから美的価値と芸

術の発展は歴史的現象です。しかし、すべてが歴史に相対的で、あるいは時代の関数であるならば、なぜ鎌倉の仏像が我々の二〇世紀に生きているのだろうか。その意味では、宗教と同じで芸術というのは超歴史的な価値があると同時に超歴史的な価値の歴史的現実の中における表現なんです。歴史主義というのでは美的価値はつかまらない。少なくとも歴史主義を徹底する限りでは。ある種のマルクス主義者の文学論というのが全部つまらないのはそれが理由です。一番大事なものをつかめていないから。

時代的に変わっているだけでは駄目なのだから、なぜ時代を突き破るのかということと同時に言わないと。突き破っていると同時にそれが歴史的だと言わないと、ただ歴史的特徴だけを指摘したのでは話の要点が逃げるんです。

そういうことはナショナリズムについても言えるんです。ナショナリズムというのは時代的に変わらない面がある。たとえば今のナショナリズムの非常に大きな面はそもそも宗教と結びつくわけです。もう一つは言語とも結びついています。だからウクライナはウクライナ語でなくては駄目なんです、ロシア語ではないんだから。クロアチア語もそうでしょう。言葉が非常に大事です。資本主義の国でもそうでしょう。ベルギーでは分裂するかもしれないけれども、フランス語でしょう。カナダはケベックと英語を話すカナダと分裂するかもしれない。私はカナダに十年住んでいたのでカナダのことをちょっと知っているんですが、ケベック州の独立の一番強い理由は言語です。つまりフランス語の権利の主張です。だからそうなると民族主義は言語と結びついてる。言語は時代によって違わない、変化はするけれども、フランス語か英語かということは時代によって変わるわけがない。

だからナショナリズムの要点は歴史主義から逃げるところがある。なぜならナショナリズムの根底自体が非歴史的だからです。

もう一つは二〇世紀思想の中で超歴史的な面を否定できないのがセックスの問題、性的な問題、男女問題というものです。時代によって違う、歴史的現象であると同時に、それは歴史に関係のない面を含んでいます。そういう生理・心理学的なジェンダーの問題、セックスの問題、性の差別の問題は歴史を越えるものなんです。それは生理・心理学的であり、歴史的・文化的面と両方あるわけです。だからジェンダーの問題というのはカルチャー

ヒストリカルな面、歴史的な面と生理・心理学的な面との交差点にあるわけで、歴史主義に還元されない。これがフロイドがなぜマルクスに還元されないかという理由です。

ところがマルクス主義を硬直した教条主義的に理解すればそうですが、河上先生が偉大な点は問題を解いたことがないということです。河上肇全集を読んで答えをさがして、その答えを覚えれば話が解決するという風にはいかないと思います。しかし学ぶことがあるのは、河上先生は肝心なところで問題を提起するんです。問題の提起は知的に提起しただけではなくて、彼の全人格、命がけです。だから全人格を投じて問題と突き当たって問題と直面してそこで苦しんでそれを体現したという点で、非常におもしろいというか画期的だと思います。それは今申し上げた宗教の問題、美学の問題、文学者でしょう、詩人でしょう、それは彼にとってどっちが大事かと言って、それは無意味で経済学者としての河上先生と陸放翁の詩人としての河上先生とはどっちも大事だったと思います。どっちらも大事だったということで、どういう関係にあるのかということはそこは知的理論的体系として問題をきれいに解いているのではないと思います。しかし、その問題を鋭く人間の問題として自覚して、それを生きたというか、生きた矛盾です。もし河上肇を本当に注意深く、彼がどういう風に生きたんかということを読んでいれば、そんなに簡単に歴史主義で話が片付くはずはないと思います。だがあんまりよく読まないから、ある時期には非常に楽しそうなマルクス主義者を排出したんでしょう。

河上肇という人はマルクス主義者として苦汁に満ちている。彼のなかに詩と経済学とが緊張をはらみながら対立しているでしょう。そしてどっちも彼にとって大事だったわけで、その問題を解決することは理論的な面では簡単にはできないほど難しい問題なんだけれども、しかし両方とも現実として彼と対立していたわけでしょう。だから苦しいマルクス主義者だったと思うんです。それが偉大な点だと私は思うんです。ところがそういうことは歴史主義だけでいけば非常に簡単ですが。だからうれしそうに楽しそうにマルクス主義者がなるわけないと思うんです。

マルクス主義者が言ってないことで大事なことはたくさんあります。大事なことというのは超歴史的な根拠をもっているすべての人間の文化と思想です。それは歴史

的な過程に還元されないでしょう、人間の一生というのは、歴史的過程であると同時に絶対的なもんです。だからそういうことは河上先生のなかにはすごい緊張があったと思うんです。それが私には魅力だし、単なる魅力じゃなくて日本思想史の中で非常に大事な、あえていえば問題提起だと思うんです。問題提起したのに良く読んでないから、むやみにうれしそうなマルクス主義者を排出してしまった。ある時期にはうれしくって、ある時期からは非常に悲しくなるでしょう。河上先生がもし生きていたら絶望なんてしないと思います。それには二つの問題がはじめからあるのであって、そのコンテクストのなかでは今の幻滅的な面もあるけれども、だから彼の立場が変わるとか、彼が根本的に今までやっていたことが間違いだとか、そういうことではないだろうと思います。なぜならば二面があるからだと思います。それが苦渋に満ちたマルクス主義者としての河上肇が現代に生きることができる、しかしとてもうれしそうな楽しそうなマルクス主義者が現代に生きることはできない、こんどは絶望になる。そうでないということでそれが私は河上先生の意義だと思うんです。

もう一つの大事な点は弁証法です。少し抽象的になりますけれども、弁証法は私の考えはフューリスティックだと思うんです。あるアイデアの発展を導く糸としては弁証法は非常に有力なものだと思うんです、だから歴史弁証法というのがあるわけです。アイデアの発展の型が弁証法的型でもって現れてくるということがあると思うんです。だから非常に強いガイドラインになるわけです。しかしある科学的な現実の描写、叙述、あるいはあるシステムー体系ができた時は、その体系内の論理は弁証法的じゃないと思います、だからエンゲルスは完全に間違っているんだと思うんです。自然弁証法というのは私は認めないです。あれは違っていると思います。

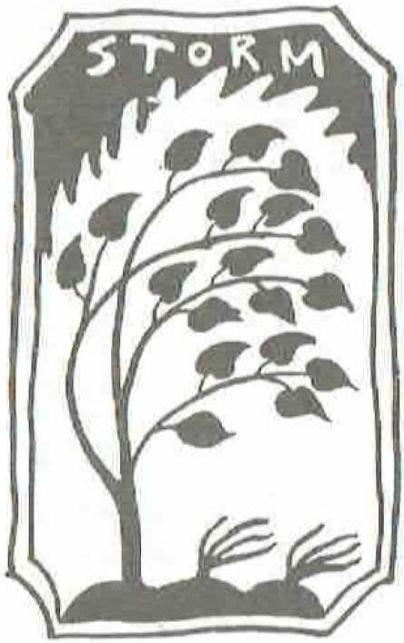
だから弁証法は自然を研究する観念の発展の型は弁証法的であっても、自然科学の発展の道は弁証法的であっても、あたえられたある時期における自然科学的体系は弁証法的じゃないです。たいていは数学的でしょう。数学は弁証法的じゃないでしょう、だから別の二つの問題だと思うんですね。だから弁証法をどういう風に位置付けるかということが第一点です。自然が弁証法的ではなくて人間の考え方が弁証法的発展の型をとっていく時に非常に生産的でありうるということです。

二番目は、有名な下部構造と上部構造の問題なんです

が、歴史を上部構造の、価値観とか政治形態、観念の時代精神の発展として理解したのはヘーゲルでしょう。そしてそれを経済の生産様式の発展として他の文化現象がそれに規定されているというふうに考えて、だから歴史の基本的なところはつまるところ下部構造の発展だと考えたのはマルクスでしょう。ところが、上部構造が下部構造に限定されているけれど、下部構造がまた上部構造に限定されていて、それをふまえながらその間に相関関係があるというマルクスのあとで、上部構造の下部構造にあたえる影響、上部構造による下部構造の限定の形としてプロテスタンテズムの問題、初期資本主義社会の問題をもちだしたのは、ヴェーバーですね。

だからヘーゲル、マルクス、ヴェーバーとくるんだろうと思うんです。ヴェーバーのあとで、上部構造が下部構造を限定し、下部構造が上部構造を限定する弁証法的関係を、どちらが決定的な要素であるかというんじゃなくて弁証法的相関関係そのものが歴史の基本的な構造であるという考え方は、十分に発展させられていないけれども、グラムシだと思うんです。

文化ヘゲモニーという考え方、彼は「獄中ノート」ですから、そんなに細かく理論的に発展してないけれども、そこにそういうものの包芽はあるとおもいますね。だから弁証法というのは、まさに上部構造・下部構造関係の解釈の歴史が弁証法的に発展して、つまるところ最後に上部構造と下部構造相互の弁証法的関係にたどりつくと思うんです。それが私の弁証法にたいする感想ですね。歴史主義と弁証法の関係からいえばそういうことを感じます。

社会主義の、マルクス主義の全部じゃありませんけれども、歴史主義と弁証法との関係からいえばそういう事を感じます。

以上です。